

「不安な兵士」のアイデンティティ構築

——自衛隊と地域社会——

一橋大学 佐藤文香

1 目的

本報告は、憲法九条を有する戦後日本社会の中で、「不安な兵士」たる自衛官たちが地域の中で働く経験を通じ、どのように自らのアイデンティティ構築をしてきたのかを明らかにする。

厭戦ムードが色濃く残る 1950 年に警察予備隊が創設されて以来、1960・70 年代の安保闘争、学生運動、反戦運動が起こる中、自衛隊は常に地域の中で近隣住民との良好な関係の構築に腐心し、民生協力を通じたさまざまな努力を重ねてきた。1995 年の阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件、そして 2011 年の東日本大震災での献身的な活動を契機として、一般市民の自衛隊に対する意識は確実に変化しつつある。また、冷戦終結後の安全保障環境の変化によって、自衛隊の任務は多様化し、海外派遣を通じた国際貢献の機会によってその国際的なプレゼンスを固めてきた。いっぽう、憲法九条改正をめぐる議論の中で、自衛隊は「日陰者」と形容され、その存在を「正統」に位置づけることが必要であるとの主張もしばしばなされる。

社会の変化の中で自衛官自身は日々どのように地域の中で暮らし、働き、市民との接触を通じてどのようにアイデンティティを育んできたのだろうか、当事者の語りを用いて探っていききたい。

2 方法

そこで、本報告では、陸・海・空自衛隊の現職・退職の男性幹部自衛官 35 名に対するインタビューデータを用いる。調査は 2013 年から 2015 年にかけて実施され、一人あたり 90-120 分の半構造化面接として、自衛官として働くという経験がいかなるものであるのかを中心に聞きとりを行った。世代は 30 代から 60 代にまたがっているが、幹部自衛官は数年ごとの移動を伴うため勤務地はさまざまである。なお自衛隊が 9 割強男性から成ること、「兵士」アイデンティティが男性性と深くかかわっていることから、今回の対象者は男性自衛官に限定している。

3 結果

分析の結果、自衛官たちは自衛隊への社会的なまなざしに敏感でありつつも、その変化を必ずしも手放しで喜んでいるわけではなくしばしば複雑な思いで受けとめていることがわかった。いっぽうで彼らが自衛隊での自らの任務を誇らしく思ったり、自衛官になってよかったと思ったりした経験を語る中には首相や幕僚長といった「エライ人」のみならず、近隣住民からの労いや接触した市民からの感謝の言葉も含まれており、「不安な兵士」たる自衛官のアイデンティティを支えるにあたって地域社会が果たしてきた役割の一端もうかがえた。

4 結論

戦後日本社会の中で自衛官が兵士としての不安定なアイデンティティを育むにあたっては、地域社会の果たす役割が重要なものとしてある。

文献

Fr?hst?ck, Sabine, 2007, *Uneasy Warriors: Gender, Memory, and Popular Culture in the Japanese Army*, Berkeley, California: University of California Press. (2008, 花田知恵訳, 『不安な兵士たち —ニッポン自衛隊研究』原書房.)